

学 位 論 文 の 要 旨

論文題目

A Study on Identity Transformation through Narratives of Native Assistant Language Teachers in Japanese Public Secondary Schools

研究背景と研究目的

現在、日本の英語教育は、令和2年度から順次実施される新学習指導要領の施行に向けて、変革の時期を迎えている。小・中・高等学校では5領域を総合的に取り入れながら、論理的な思考を深める授業デザインへの転換が図られ、各校のALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）との授業づくりは益々重要な課題となるであろう。1987年のJETプログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme：外国語青年招致事業）導入以降、公立学校ではALTと日本人英語教師によるティーム・ティーチング授業が実現してきた。ALTの中には、長く滞在する者もいる反面、1年を待たずに帰国する者もいる。日本の教室という新しい環境の中で、いったい彼らはどのように自らを位置付けていくのか。本研究では、3名のALTの語りを社会文化的な視座からテキスト分析し、日本で英語教育に従事することを通して展開される彼らのアイデンティティ変容を探った。

ALTの歴史を振り返ると、JETプログラムの導入から30年余りが経ち、その間に中・高だけでなく小学校でもALTとのティーム・ティーチング（TT）が実現した。日本のALTに関しては、これまで多様な側面から研究がなされている。例えば、ALTとJapanese teacher of English（JTE）によるティーム・ティーチングに着目した研究の中では、Tajino et al.（「Team teaching and team learning in the language classroom: Collaboration for innovation in ELT」, 2015）が、ALTとの授業をティーム・ラーニングと捉えて授業研究を行っている。政策面に着目した仲（「言語政策としてのJETプログラムⅡ：制度的側面における課題と提言」, 2006）は、ALTが英語に特化したAET（Assistant English Teacher）としての存在になっていることに注意を促した。また、ALTとの授業による効果に着目した研究では、上垣（「ティーム・ティーチングに関する調査・研究－JTEとALTの意識を比較して」, 2004）が、ALTの授業を多く受けた生徒はリスニング力が高い傾向があることを明らかにした。ALTの実態調査では、特に上智大学による研究が、小・中・高等学校に勤める1807名のALTを対象に大規模な質問紙による調査を行い、校種に合わせた調査結果を公表した。さらに、日本でALTとして勤めた経験を持つSimon-Maeda（「Being and becoming a speaker of Japanese: An autoethnographic account」, 2011）は、オートエスノグラフィーとして自らの経験を綴っている。以上のALTに関する研究を概観すると、ALTが日本の教壇に立つようになって以降、制度的な側面、ALTの実態調査、学習者や教師への影響、ALTとの授業研究、教室にいる者たちの関係性など、多様な視点から研究が深化していることが分かる。その一方で、個人のALTに寄り添うアプローチは非常に少なく、今後さらにALTとのティーム・ティーチングの質を高めていくためにも、ALTの内面的な要素を探る研究の必要性は高まっている。

そこで本研究では、以下を研究目的とする。

1. ALTたちは、日本の学校における外国語教育に従事する中で、どのように自分たちのアイデンティティ変容を辿っているのか。
2. 彼らの教師としての成長を引き出すのはどのような要素なのか。

これらの目的を達成するために、本研究では、社会文化的視座からALTたちのナラティブを分析し、そのアイデンティティ変容の様子を探求した。

第1章：最近の日本の英語教育改革とAssistant Language Teacher (ALT)の役割

本章では、日本の外国語教育に焦点を当て、新学習指導要領を基に近年の教育改革について概観した。また、1987年からJETプログラムを担ってきたThe Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR：一般財団法人自治体国際化協会)の資料を基に、日本の外国語教育におけるALTの役割について確認し、ALTに関する先行研究を精査した。先行研究の特徴をいくつかの種類に分けて整理した後、今後の英語教育改革に沿った学校教育の発展に向けて、ALTの内面を探究する研究の必要性を示唆し、本研究の特徴と研究目的を確認した。

第2章：教師のアイデンティティ

本章では、本研究における言語教師のアイデンティティについて、Norton (1997, 2000, 2013) のアイデンティティの概念を援用しながら説明し、Sakamoto (2011) の3つの気づきの視点を踏まえた言語教師の成長について論じた。Sakamoto (2011) が捉えた「認知的気づき」「感情的気づき」「同僚性への気づき」の概念は、本研究においてALTの語りを分析する上で重要な役割を果たすものである。また、日本の教育現場で自らの母語である英語を教える中で、ALTたちの日本語学習や日本の学校文化、教師として関わる学校生活での努力や取り組みに焦点を当てた「投資 (investment)」 (Norton, 2000) という概念について説明を加えた。さらに、本研究における筆者・分析者自身の立ち位置を表すteacher-researcherという用語についても解説を加えた。

第3章：ナラティブ研究

本章では、ナラティブ研究 (語りの研究) について概観した。特に近年、医療の分野において注目を浴びているNarrative Based Medicine (NBM) (Sharon, 2006, 2017) に触れ、最近のナラティブ研究の大きな流れを解説し、最後に昨今の言語教師のナラティブ研究について説明した。授業における自らの経験を語ることで、または語り直すことを通して、言語教師たちは自分自身の授業実践を辿り、教室での経験を内在化させながら理解し、教師としての自らを意味付けるプロセスを辿っている。教室で日々実践している外国語授業のより深い理解を通して、語り (narratives) 及び語る (to narrate) が、教師たちにとって自らの教えの理論を作り出す力強いツールとなっている点について、過去の研究を踏まえて解説した。

第4章：データ分析

本章では、本研究におけるデータ及びデータ分析の方法を説明した。本研究は、Grounded Theory Approach (GTA) を基にした分析方法を用いた質的な研究であり、加えて精読、文体論の分析手法も援用している。手順としては、まず、3名のALTへ8か月から1年の期間をあけて行った2度のインタビューデータをテキスト化し、感受概念の生成、データの切片化、切片のコード化を行った。各切片をカテゴリーごとに抽象化し概念化した後、カテゴリーマップを用いて概念関係図を作成し、概念の再構築を行った。また、必要に応じて、授業の録画記録、フィールドノート、3名のALTとそれぞれティーム・ティーチングを行った日本人英語教師へのインタビュー、ALTの授業に参加した生徒のリフレクション、生徒への質問紙、インタビューに対する筆者のリフレクション記録も分析した。本章では、これらの手法について詳細に説明を行った。

第5章：分析・May

第5, 6, 7章では、新しい日本の学校でのALTという教師経験の中で見られた彼らのアイデンティティ変容の様子を辿りながら、個々の教えの理論の全体図を俯瞰し、教師としての成長の過程を探った。分析の結果から、日本でALTとして教壇に立つ日々の中で、彼らが教えの理論として持つ概念を明らかにしながら教師としてのアイデンティティ (再) 構築の様子を説明する。そこでは、彼らの語りを「3つの気づき」 (Sakamoto, 2011) 及び「investment」 (Norton, 2000) の概念を基に質的に分析を行った。

まず、第5章ではカナダ人のJET-ALTであるMayのナラティブを分析した。彼女の1度目のインタビューでは、日本の学校で教壇に立つことを通して、「教えること」への視点

が変わったことに注目し、同僚とのやり取りを通して、自分の個性を取り入れながら教材を作っていく視点を得ていった様子を詳細に分析した。2度目のインタビューでは、教室で彼女が軸とする教えるの理論が確立された点に注目し、授業への振り返りの中の気づきや発見を通して、新しい教材への挑戦が芽生え、自らの教えること自体を建設的に変えていき、実践からの学びを得ていく一つのサイクルが生まれた点を明らかにした。具体的には、授業の経験を通した学びから捉える「認知的気づき」、生徒たちに寄り添いながら教師としての達成感を高めていった「感情的気づき」である。さらには語り手自身を示す人称代名詞が“I”（1度目のインタビュー）から“we”や“us”に変わった点を指摘し、日本人英語教師（Japanese teachers of English: JTE）とともに授業の質を高めていく視点を生み出した「同僚性への気づき」が、彼女の教室での新たなアイデンティティ構築において重要な役割を果たした点を指摘した。また、彼女は生徒や同僚との関わりの中で、日本語学習に熱心に取り組み、生徒に英語を教える際の日本語の必要性を感じ、独学で日本語を勉強したが、その彼女の「投資」が日本でのアイデンティティ確立において果たした役割についても分析・考察を加えた。

第6章：分析・Andrew

本章では、ニュージーランドからJETプログラムで来日したAndrewの語りを分析した。彼の1度目のインタビューでは、来日前に持っていた日本の生徒のイメージと目の前にいる現実の生徒とのギャップに対する驚きに注目し、英語の理解が難しい生徒たちを前にした戸惑いについて分析・考察を加えた。2度目のインタビューでは、生徒を前にした自分の立ち位置を「教師のような存在」と「兄のような親しい存在」の2つの立場から捉え、それらを行き来しながら生徒との関係性を探っていった様子が明らかになった。自分を正規の教師と認めようとしない英語が苦手な生徒たちを前に、授業を通した「3つの気づき」を複雑に交差させながら、彼は自らの学習経験を基に英語ドラマの授業を試みている。言語の壁など厳しい状況を克服し、ドラマ作りや練習を通して、日本語や英語を交えながら徐々に関係性を築いていった様子は、彼の教師としての新たなアイデンティティ構築のプロセスであると言えるが、その詳細についてナラティブ分析より明らかにした。さらに、日本語学習や多くの勤務時間外の生徒との関わりなど、彼の行った「投資」が、教室の中での立ち位置と教師としての成長に与えた影響について分析・考察を行った。

第7章：分析・Simon

本章では、母国アメリカの大学で第二言語習得の文脈において英語を教えた経験のある姉妹都市派遣のALT、Simonの語りを分析した。彼の1度目のインタビューの中には、すでに彼自身の教師の信念が語られていた。さらに、教室で取り組む授業や言語活動の目的を同僚と共有することで、授業内外での言語活動をより豊かに捉えていた様子が明らかになった。一方2度目のインタビューでは、特に同僚性への気づきが彼の授業への視点を大きく変えていったことが浮かび上がってきた。語りを通して、同僚の日本人英語教師に尊敬の念を抱く場面が多く見られ、自分とは異なる特性を持った同僚の日本人英語教師の影響を受けながら、彼らとの授業を自らの学びとし、自分自身が教師として成長している感覚を「3つの気づき」を通して体感している様子が明らかになった。また、「投資」に関しては、彼は外国語学習者としての視点を生徒と共有するという目的を持って日本語学習に取り組んでおり、日本の学校文化にも溶け込んでいこうとする姿勢＝「投資」は、生徒にも同僚にも伝わった。このように成長する教師としてアイデンティティが変容していくSimonの様子を、本章では詳細に分析した。

第8章

本章では、第5章～第7章の分析結果を踏まえ、教室でALTのアイデンティティ変容を促した要素に関して考察した。

まず、それぞれのALTの1度目のインタビューに再度注目し、彼らの語りに反映された文化的、社会的、歴史的背景について考察した。

次に、第2章で説明したNorton（2000）のアイデンティティの概念についてALTのそれ

ぞれの語りから再考した。Nortonは、非英語話者が、母国における政治的、経済的な理由から英語圏に移住し、様々な困難や苦痛を味わいながらも、自分や家族の将来にとって必要不可欠であるという理由から、新しい言語や文化を学び続けることを、学習者の「投資 (investment)」と表現している。本研究で分析したALTたちのうち、Mayは日本人英語教師と生徒たちが日本語でやり取りしている場面を振り返り、「何が起きているの分からない」時間を多く過ごしたと話している。また、そのような場面では「どうすることもできない」とも述べている。これらの言語の壁を乗り越えるべく、彼女は独学で日本語を勉強したり、生徒や教師との授業時間外での関りや関係構築に努めたりと努力を重ねてきた。帰国直前には日本語能力検定1級を取得し、この「投資」によって得られた日本語力は、いざという時に生徒に日本語で示すことを可能にし、結果的に彼らとの良好な関係を築くことに役立っている。他のALTの語りにも前述した「投資」が描かれる場面がある。つまり、彼らの場合は、教室と自分たちとを分ける境界線のさらにまだ手前にいたということが明らかになった。彼らの感じた境界線を引く要素となったのは、言語や文化の壁であったと言える。日本人英語教師ならば、初めから共通言語を共有しているが、ALTの場合は日本語が分からず「いったい何が起きているのか」と感じる教室環境から、自らへ投資を重ねることで、徐々にその境界線を越えていき、新たなコミュニティでのメンバーシップを得ていったことが分かる。日本の教室というALTにとって全く新しい社会文化的コミュニティと自分との間にある境界を越えていく (boundary crossing) ために投資がうまく功を奏した場合、教室での自らの所属感が高まり、そこで初めて「3つの気づき」(認知的・感情的・同僚性)のループを回していった様子が浮かび上がる。本章では、それらの過程を辿りながら、彼らのアイデンティティが(再)構築される中で、教師としての成長へとつながっていった点について詳細な考察を行った。

まとめ

本研究では、日本の公立学校に勤めるALTのアイデンティティ構築のプロセスに関して、インタビューによる語りの分析より論じた。日本の英語教育現場では、今後ALTたちが教師としての力を十分に発揮することのできる環境を作り出すことが不可欠であるが、本研究がその一助となることを確認した。